

(一社)日本船舶機関士協会

設立の経緯

戦後復興期

- 終戦後の昭和20年8月時点で、
残存船腹は3,000Ton以上の航洋船17隻(約10万GT)
船員は職員約16,000人、部員約49,000人であった。
- 昭和21年1月 米国から215隻の船舶を貸与され、
外地残留邦人・軍人の引上げ、救援物資の輸送が
開始された。
- 貸与米船は昭和21年末には返還されたが残存日本
船で昭和25年まで帰還輸送は継続され、合計625
万人の引揚者を輸送した。

戦前の船舶機関士の活動

- 郵船機関士協会
大正12年11月発足 昭和14年1月解散
- 商船機関士会
昭和2年10月発足 昭和14年2月解散
- 機関士技術研究所(各社有志に依る団体)
昭和16年3月設立 大戦の進展と共に
自然消滅

協会の設立

- 船舶運営会に依る船員配乗一元化
- 貸与米船の返還航海での各社混乗



船内及び待機中に機関士の処遇や戦後復興への意気込みが話し合われ、船舶機関士の職能団体を結成すべしとして、昭和21年11月に発会趣意書を発行し、各社の機関長・士へ呼びかけた。



昭和22年5月 協会設立準備委員会立上げ
昭和22年9月20日 任意団体としての「日本船舶機関士協会」発足

初代会長 平岡亨(日本船主協会)
副会長 加藤保三(大阪商船)

日本船舶機関士協会の設立趣旨

昭和22年9月20日

国家再建の先駆は海運の復興である。

しかもそれを為し遂げる為の鍵を握っていると言っても過言でない吾々機関士の立場は、最大且つ重大な責任者である。

それにも拘わらず船内外における機関士の現実を凝視する時、吾等の感慨や果たして如何？

機関士の現実の悩み、それは勤労の割合に報いられる事少なく義務の遂行を責められる反面行使すべき権限の認められざる環境の中で、汗と油にまみれつつ常に技術的良心に鞭打たれ縁の下の力持的存在として悪戦苦闘している姿ではないか。

過去も現在も海運界の癌である吾等のこの悩みを解決せんが為、先覚の士により屢々論議され企てられたのであるが、吾等の力の不足は其の順調な発達を見ず今日に至り、精神の拠り所を失わしめたるは誠に遺憾である。

しかし、徒に嘆くを止め新しい理想に前途の光明を求めて活動を始めよう。船内職域の明朗合理化は吾らの手にて実現すべきである。

同じ職域の中に其の喜び、苦しみ、悩みを無言の裡に理解し得る全日本の船舶機関士諸君、吾等は先ず互いに相寄り相協力して、真に進むべき道に向かって大同団結し、自らの手により自らの道を拓いて行こうではないか！

翌昭和23年4月24日 神戸にて第一回臨時総会を開催し以下の運営方針を採択。

- 1、本会の現状は労働団体ではない故、海上大衆の労働問題は海員組合を通して行い、そのためには適当な人材を選んで組合において大いに努力してもらう。
- 2、船員遺家族援護会に協力する。
- 3、機関士の待遇が他部に比し非常に不利である点よりして、将来船内における「指揮命令権」の改革を考慮する。
- 4、戦標船・老朽船の処理と、その機関の能率向上。
- 5、機関部員の不足原因とその対策、即ち機関部員の待遇改善。
- 6、若き機関士を多数必要とし而して登りつめたる所は一つであるため、他部に比較して自然淘汰をきびしく受けねばならないが、之の対策としてより以上多く陸上における機関士出身者の位置を確保しなければならない。
- 7、研究誌及び会誌の発行
- 8、多数会員の獲得、このために会員各位のご尽力を願う。

協会設立後の活動

●船内服務規程(昭和23年5月)

船舶運営会が作成した素案では、機関長を一等航海士、一等通信士、事務長と同列視し一等機関士の立場を無視したものであった。機関長は船長と同列であり一等機関士は一等航海士と同列とすべしと海員組合に提示→原案は破棄された。

●機関長の権限(昭和23年6月)

考課表作成に関し機関長の権限を明確にするよう申し入れ。

●機関部諸手当の改善を海員組合へ要求(昭和23年1月)

結果 機関部作業慰労金が実現された。

●機関部定員合理化交渉に於いて海員組合を支援 (昭和24年4月、昭和26年9月、昭和27年7月)

※社団法人日本船舶機関士協会発足(昭和27年9月27日)

その後の主な活動

- ディーゼル機関粗悪重油使用の論文発表(昭和26年8月)
 - 「最近の機関装備の問題点」を発表(昭和27年4月)
 - 「機関の修理及び再生潤滑油使用」
「燃料油並びに潤滑油の添加剤」
に付いて懇談会開催 (昭和28年5月・7月)
 - 「度量衡換算表及び諸表」を発行 (昭和28年8月)
 - 「ディーゼル船の低質油使用実績」資料発表(昭和28年10月)
- ※技術誌創刊号発行(昭和30年1月30日)
- 以後半年毎に会誌を発行し、現状での技術的問題点、各船での実績等をアピールした。

会誌の内容

創刊号(昭和30年1月30日発行 全81頁)

M.A.N DIESEL ENGINEにおける低質燃料油の使用について
水洗法による低質油清浄試験
軽油及び重油の添加剤について
ディーゼル機関のピストリング摩耗並に折損に関する調査
祐邦丸汽罐とA.C.C.に就て
熱ポンプによるホットサニタリーの加熱時間について
汽罐給水の加熱による溶存酸素量の変化について
潤滑油添加剤の最近の傾向
新造船“浅間丸”主機のフラッシングについて
改2A型減速歯車のピッチング・スンプ写真に就いて
給水処理

正会員 小岩重正・林達
川崎重工 浦木侃治
三菱石油 石田雅昭
正会員 竹末安彦
正会員 五味廣貞
海技専門学院 後藤清市
正会員 佐藤晴三
三菱石油 森井治彦
氷川商事 石油部
正会員 宮川績
正会員 木脇充明

会誌の内容

第二号(昭和30年6月30日発行 全86頁)

氷川丸主機クランク・デフレクション矯正について

SR型自動電圧調整器について

オルガノ式モハット型純水製造装置による缶外給水処理に就いて

給水処理

歯車の潤滑油(歯面の損傷)

圧縮機の潤滑油

蒸気タービン・ジャーナルの腐食

質問と答

正会員氷川商事 小岩重正

正会員大阪商船 福田薫

正会員川崎汽船 遠藤千代

正会員神戸商船大 木脇充明

スタンダード・ヴァキューム 技術部

三菱石油 豊口満

シェル石油テクニカルデパートメント

第三号(昭和31年3月30日発行 全76頁)

北斗丸ガスタービンについて

MS機関と低質油焚焼について

熱交換器の簡易計算法

低質油の焚焼に就いて

座談会(低質油使用ディゼル機関におけるシリンダーライナーの摩耗とその潤滑)

2サイクルディゼル機関の過給に就いて

ディゼルエンジンのシリンダー給油器サイトグラス用液について

燃料助剤に関する研究

質問と答

航海訓練所 西井五郎

日本郵船 増田礼二

海技大学校 向原誠也

日本郵船 仲田文四郎

浦賀玉島ディゼル工業 三宅節二

シェル石油テクニカルデパートメント

日本油脂(株)会社

以下会誌各号の内容のみ紹介する

第四号(昭和31年11月10日発行 全70頁)

材料が疲労破壊を起すか否かを計算に依り決定する方法
現実と海技試験問題、 直流機の整流、 汽缶液面指示装置、
抵抗概念による熱交換装置の基礎的解析、 過熱器付汽缶の封鎖について
冷凍機潤滑油と冷媒の作用について、
「講演論文」 水力機械の気泡流とその音響選択による判別
ディーゼル機関のクランク軸焼嵌部のスリップ事故に就いて
船用機関に於けるクランクケースの爆発(その1, 2)、 助燃剤に関する一考察

第五号(昭和33年7月30日発行 全64頁)

船用大型ディーゼル機関における低質重油梵焼とシリンダー潤滑油に就いて
4Cycle Diesel Engine Crank Shaft摩耗及び偏耗に就いて
水管ボイラーに於ける圧力降下速度及び熱負荷増加速度と水部の蒸気体積増加量に就いて
三相分巻整流子電動機速度制御による渦巻ポンプ特性の推定解析
潤滑剤の境界摩擦に関する一考察
鋳鉄製蒸気管接手の破壊原因に就いて
耐摩耗及び極圧性タービンオイルに就いて
論文審査の末席をけがして